

東大会

ベテランの高野由紀がゴールを駆け抜け会場にトップタイム更新を伝える放送が流れる中、山口大助はいつもの力強いフォームで静かにゴールしていた。高野のインタビューが始まる脇をすりぬけダウンに向かう彼のトップタイム大幅更新の放送はされなかった。運営者が気づかなかったのである。それほど、彼のタイムは群を抜いていた。

小田原の石垣山一夜城公園を会場に開催された第25回東大OLK大会は男子、女子ともに世界選手権代表選手、山口大助（ES 関東）と塩田美佐（みちの会）の圧勝に終わった。男子は2位が最近山岳系イベントで力を発揮している柳下大（Forester）が、アップ610のコースを快走。3位に入った最近埼玉から愛知に引っ越したベテランの新隆徳（入間OLC）は後半で盛り返した。女子は4月に行われた世界選手権代表選考会で大怪我した高野由紀（東京 OLC）が安定した走りでの2位。3位には世界選手権代表の木植早生が入った。

今回出走していた世界選手権代表の他の選手は振るわなかった。紺野俊介（横浜 OLC）は前半でミスを重ね後半盛り返したものの7位に終わった。タフなテレインで強い円井基史（多摩 OL）も前半で出遅れ、リズムを取り戻せず 14

位という結果だった。女子は田島利佳（みちの会）がミスを抑えた走りで4位。落合志保子（OLC ルーパー）は4番まで2位だが、後半振るわず 14 位。渡辺円香はペナであった。

女子クラスを優勝した塩田は 16 レッグのうち半分以上の9レッグでトップラップ。潜在的なオリエンテーリング速度の目安である巡航速度では驚異的な 90.7。全くミスしていない状態で比較した場合、2位の高野よりも約 10% 早いことになる。

男子の山口は中間時点でトップと 1,2 分差あったが、後半で一気にペースを上げる。11 番コントロールから 1 レッグを除き全てトップラップ。トップにたった 8 番からゴールまでのタイムは 29 分 48



優勝の塩田美佐と山口大助。賞品の HAGLÖFS のウェア着用

秒。後半 2 番目に早かった紺野よりも 1 割以上早い。

山口のタイムは諸条件が全て揃っていたとしても厳しい、とコンローラーの桜井太郎が驚くほどのタイムだった。一方本人はレース内容に不満が残る。

「全然良くなかったです。現在地ロストはしなかった、くらいですね。遅いなりに走れたとは思いますが。走っている間は人にほとんど会わなかったのが遅いかなと思っていました。後半も特によかったわけでもなく、ポスト周りでも真っ直ぐアタックできていませんでした。

評価できるところといえば、小さくミスはしていたけど全体的に把握していてリロケートが早かった点です。でも、まだまだ見通しの悪いところでのアタックをきっちりしていかないといいない。ミスしないで回ることが課題です」

このような植生の悪いエリアにおける正確且つスピーディーなナビゲーションは、トップレベルで競うために必須条件となってきている。



男子の入賞者。篠原岳夫（渋谷で走る会）、山本英勝（横浜OLC）、松澤悠行（京葉OLC）、新隆徳、柳下大、山口大助

この傾向は近年の地図の精度向上が起因しているといえよう。特に、藪いエリアがしっかりと調査されている。今回の地図、『太閤一夜城』を10年以上前に作成された横浜国大作成の『続・石橋山古戦場』と比較すると大分印象が異なる。古い地図では藪いエリアはべた塗りされていることが多い。植生が年月を経て変わっていることを差し引いても、現在の地図は藪の表現の仕方が改善されている。べた塗りされているところは少なく、藪いエリアが広がっていても、しっかりと通りやすいところはB、通りにくいところはCと、調査された気配が見受けられる。

男子エリートのポイントとなった藪い7番から12番のエリアは、「まだ精度の向上は必要だが表現力がとても良い。ぜひ誰がやったか知りたい」と現在日本のトップマッパーである羽鳥和重も高く評価している。

地図やコースといった競技に密接している面をはじめ、高い品質の運営が日本全体の競技レベルを上げる大きな役割を果たしていることは間違いない。今回の東大OLK大会は地図以外の面でもいろいろ工夫がなされていた。

表彰式ではスポンサーの株式会社鈴廣蒲鉾から蒲鉾の詰め合わせとHAGLÖFSからはゴア製の上着が提供

された。現在のオリエンテーリング大会では優勝者にスポンサーから賞品が贈られるということはあまりない。しかし、プロのメジャースポーツでは賞金があるのは当然である。一般のランニング大会でも多くの大会ではスポンサーからの商品が出る。賞品があるから技術向上に励むということはないにしろ、大会に対する意欲を高める動機付けにはなる。また表彰式の活性化にもつながり、エリート優勝者によりスポットライトを当てるのに役立つ。

同じように、競技者にスポットライトを当てる試みがかわら版であった。全てのクラスの予想と紹介がされている。

ほかにも、中間掲示のある速報ボードがある、青空会場にゴールする、放送を行いインタビューなども積極的にする、など競技そのものだけでなく、競技時間以外を楽しませる工夫が数多くなされていた。運営能力が高い東大OLKだからこそということもあるが、学生ならの大胆さも背景にあるだろう。

地域クラブの場合、たとえば6月1日という時期の完全な青空会場は、雨が降った場合を考慮し、回避していたと思われる。しかし、天気がなんとか持つという幸運があったにしろ、多くの参加者はテントを持ち込むなどそれぞれ対応を図っていた。なんとかなるものである。

春のシーズンの終わりに位置する東大OLK大会は、今後、新入生が初めて参加する大会であると同時に、毎年開催となった世界選手権前の最後大きな大会という位置づけとして重要視されていくだろう。オリエンテーリングを始めたばかりの若い学生たちが代表の走りに魅了される。そんな大会に育っていくことを予感させる大会であった。

ME 結果速報			
1	山口大助	1:13:42	ES 関東
2	柳下大	1:23:03	Forester
3	新隆徳	1:25:02	横浜OLクラブ
4	松澤俊行	1:25:05	京葉OLクラブ
5	山本英勝	1:25:16	横浜OLクラブ
6	篠原岳夫	1:26:07	渋谷で走る会
WE			
1	塩田美佐	1:09:53	みちの会
2	高野由紀	1:18:17	東京 OLC
3	木植早生	1:19:03	チーム白樺
4	田島利佳	1:20:33	みちの会
5	三好暢子	1:29:13	上尾 OLC
6	宮本知江子	1:31:32	京葉OLクラブ

(山本英勝 hidio@yahoo.co.jp)

